

二胡情縁

——二胡少年の夢——

趙 寒 陽 著／朱 新 建・陳 惠 明 訳

著者紹介

趙 寒陽 ZHAO HANYANG (ちょう かんよう)

著名二胡演奏家、二胡教育家、中国江蘇省常州市生まれ。中国中央音楽学院民楽系卒業。現在、中国中央音楽学院民楽系主任教授、大学院指導教官。中国二胡学会副理事長、中国民族管弦楽学会理事。

趙寒陽氏は中国民族音楽家として、ヨーロッパ、アジア諸国を歴訪し、演奏会や民族音楽の公開講義を行う。また、二胡関係の学術論文・楽譜集や CD アルバム・ビデオ教材などを多数発表。中でも、中国中央テレビで放映された中国初の民族楽器教育テレビ番組「しっかり学べる《二胡》教材」は日本のドレミ楽譜社から『やさしい二胡教室』日本語版 DVD が発売され、好評を得ている。その一方、女子十二楽坊の二胡奏者の指導教官の一人でもあり、中国二胡コンクールの審査委員としても、その卓越した指導力・演奏力は国内外において高く評価され、その業績は『中国音楽家名録』、ケンブリッジ大学の『世界紳士録』にも紹介されている。昨年10月に初来日され、中央音楽学院民族音楽団一行5人を率いて長野、名古屋、東京、大阪を歴訪し、日中友好文化交流二胡演奏会及び二胡公開講義を開催し、好評を博す。関西21世紀交響楽団との共演で、福知山 JR 電車事故慰問演奏をされた。

主要著書は『二胡教程・基礎・中級・高級』、『二胡演芸知識500問』、『二胡考級主要曲目詳解』、『通向二胡演奏家之道』、『二胡演奏100曲シリーズ（全1000曲）』、『二胡弓法技巧訓練』など、二胡教材・楽譜本・著書33冊、学術論文80篇を超える。

二胡について

中国二胡（Chinese Violin）は胡琴とも言い、構造簡単な擦弦楽器ですが、時に哀愁を漂わせ、時に軽快で楽しく奏でることができ、独奏でも伴奏でも大活躍する中国民族音楽における代表的な楽器です。紫檀などの硬い木で作られた胴体に、2本の弦を張り、弦はそれぞれDとAに調弦されています。6角形や8角形の琴筒にニシキヘビの皮を張り、人の声に近い音色を出すことができます。弓に馬の尾の毛を使用し、バイオリンと同じく騎馬民族の楽器で、中央アジアのカマンチェが祖先といわれ、シルクロードを伝って漢民族に入ってきたのは遥か一千年も前の唐宋時代であったと考証されています。2本の弦に弓を挟んで弾く漢民族の奏法と合致してできた楽器である。現代の中国二胡は、およそ88年間にわたる3段階の発展をへて今の二胡の形と演奏スタイルを形成しました。

【現代中国二胡発展三段階】

1. 二胡革新段階 1918～1949 中国伝統の伴奏楽器から独奏楽器へ 代表曲「空山鳥語」
2. 二胡創造段階 1950～1979 中国伝統文化の重宝として中国全土に発展 代表曲「三門峽暢想曲」
3. 二胡昇華段階 1980～現在 中国の二胡文化として世界へ発信 代表曲「長城随想」

現代中国における二胡のプロ演奏家は20万人以上あり、二胡愛好家や学習者は1000万人に上るといわれています。この中国の二胡文化は2003年8月23日にかの「女子十二樂坊」の鮮やかな日本デビューにより旋風を巻き起こし、そして、2005年5月に相次いで在日のプロの中国人二胡演奏家による「日本二胡振興会」や「日本二胡学会」が設立されました。日本における中国二胡愛好家や二胡学習者は10万人以上に上るといわれています。（朱新建）

二胡を桜と共に咲かそう

2005年10月、私は日本愛知学院大学の朱新建先生のお招きを受けて、民族楽団を率いて名古屋、大阪、東京などの都市へ公演、訪問しました。訪問先々で、日本の友達や華僑の皆さんより熱烈な歓迎を受け、公演も大きな成功を収め、とても感動した日々でした。特に東京の創価大学では、学生の皆さんは「周桜」の前で私達のために盛大で厳かな歓迎式を行って下さったことは私達にとっては一生の思い出となりました。更に日本は景色が美しく、きれいな町並みと自然環境、そして皆様の暖かいおもてなしは、私達は深い印象を受けました。

そして、日本の皆様の、中国二胡に対する熱狂な気持ちが伝わり、一層、中日文化交流のために尽くそうと、決意を新たにさせていただきました。このために、私は帰国後、音楽の仲間

数人と、「趙寒陽二胡芸術センター」を立ち上げ、皆の力で私はずっと夢見る事業を実現させるに至りました。私は、「趙寒陽二胡芸術センター」のメンバー全員の努力によって、必ずや中日二胡文化交流の新紀元を切り開くことができるものと堅く信じております。

最近私の伝記文学である『二胡情縁』は出版されました。この本の中では、私の成長と体験はつぶさにしかも生き生きと記されているので、これは、ファンの皆様にとっても、読み甲斐のある本だと信じております。

今回は朱新建氏と陳恵明氏の翻訳によって、日本の二胡愛好家の皆様にお届けすることができて嬉しい限りです。ここに、朱新建氏と陳恵明氏に心から感謝の意を申し上げます。

二胡は中国伝統文化において咲き誇る花々の一つです。そして日本は私たちの一衣帯水の友好隣邦であり、中日両国民が子々孫々まで仲良くしていく願望と共に、二胡を桜と共に咲かそうではありませんか。

中国中央音楽学院教授

趙 寒陽

2006年5月26日

序

寒陽は私の学生時代からの級友です。文化大革命終結後の1977年に回復された初めての大学入学試験を回想すると、この忘れられない時代に私と寒陽は共に中央音楽学院に受かり、同窓の級友となったわけです。当時の大学生の、知識に飢えているように発憤して勉強する精神は、すでにこの世代の独特な標識となり、歴史の絵巻の中に特筆されています。私は寒陽とは学部が違いますので、ふだん顔を合わせた時間が余り多くなかったのですが、彼の勤勉さと努力家のうわさは、よく耳にしたものです。私の故里も南方なので、同じ南方からきた寒陽のことですから、北方の厳しさと苦学の体験は痛いほど知っています。恰も彼が本の中で述べたように、「ハクサイとマントウを、命を維持する薬かのように呑み込んでやっと今日まで生き抜いてきた」と。

卒業後は、私も彼も本学に就職し、教員となりましたので、交流する機会も多くなりましたが、それでも彼はいつも忙しかったです。寒陽の私に与えた印象は、彼は決して機転を利かせて物事を考える人ではありません。彼はこつこつと勤勉で、執着心が強い。ある事に取りかかると、黙々と全身全霊投球し、目的に達するまで遣り通す。これは彼が多くの業績を積み上げた原因の所在でしょう。私はよく同僚たちにこれが「寒陽精神」だと言って評価してしまし

た。2003年の「非典（SARS、新型肺炎、重症急性呼吸器症候群）」の過ぎ去った間もない8月に、寒陽は彼の書き立ての、この『二胡情縁』を見せに持ってきて、そして私に序文を書いてくれないかと頼んできました。最初は、彼のこの洋々たる十数万字にも上る自伝小説を十分に重要視していませんでしたが、読み始めたら思わずストーリーの面白さ、感情の真摯さと文筆の流暢さに惹きつけられました。読んでいるうちに、自分が懐かしい童年時代や少年と青年時代にタイムスリップしたように、書中の人物と共に呼吸し、共に生きるような気がしました。それで私は躊躇なくこの本に序文を書くことを約束し、あの特別な時代への追憶とモニュメントのためにもと思っています。

音楽家の成長はいつも苦難を伴にしています。往々にしてより多くの苦勞をしてはじめて認められるわけです。今日は、音楽を勉強する人は数量的には大幅に増加している中、一部の学生は盲目的かつ自信に欠けている状態にあることは事実です。私は、このような学生にとって必要なのは、もっと多くの傑出した音楽家の成長過程を知り、彼らの成長する過程における様々な艱難困苦を体験し、彼らがいかに音楽事業のために刻苦奮闘の精神を知ることだと考えています。そうすれば、学生諸君にとっては自信の増強に繋がり、向上の意識が強まって、正しい世界観や人生観が樹立でき、一生の利益になると思っています。したがってここに、突出し成功した教授及び演奏家に提案したい。自分自身の物語を本にして若い世代に読んでもらいましょう。これは学生諸君にとっては最高の徳育教育ではないでしょうか。これも本書の序文を書く由縁です。

私たちは本書からは一人の労働者の息子が、いかにして著名な二胡演奏家と教育家になった過程を見ることができます。私は、心から寒陽が更なる発展をし、胡弓教育や二胡演奏と音楽芸術の学術研究において更に上を行き、我が国の民族音楽事業のためによりいっそうの貢献をされますようにと祈願します。また、若い音楽学生たちにはこの本の中から人生の醍醐味を味わい、本当に「寒陽精神」から養分を汲み取ることができればと期待してやみません。

2005年12月10日

王 次昭

イントロ

一夜のぼたん雪で、天と地は一面に白く雪に覆われていた。「ポーポー」と吹いている北西の風はその威力を見せ付けているみたいに、その日の気温は氷点下十数度まで下がっていた。南方ではこれは稀に見ない厳冬の天気で、神様はまるでこの厳寒で人々にその冷酷さを示して

いるかのようだ。

蒼茫とした広大な平野では、何人かの人は1台の大八車の霊柩車を引きながら忽々と前へ足を伸ばしている。彼らは誰も口を聞かない。ただ黙々とひたすら歩く。まるで寒い風に口を凍らせたようだ。口を凍らせただけか、彼らの心まで氷点下に冷え切っていたのだ。

大八車の横を歩き、霊柩に手を添えているのは30代前後の男だ。彼はたくましい体つきで、端正な顔立ち、眉間は悲しげに顰めていた。私の父だ。車を引いているのは同じ工場の2人の労働者で霊柩に永眠しているのは私の母だ。車の後ろ手には50代あまりの女性がついていて、1歳になったばかりの赤ちゃんを抱いている。私の祖母で、しっかり私を抱いている。

1羽のカラスが「カーカー」と鳴きながら飛んでいた。父はかすかに頭をあげてちらと見たが、またため息をついて、黙々と思いにふけていた。突然、「ワーッ」と、子供の泣き声が、夜明けの静寂を破った。早起きして出発する前に着替えた新しい綿入れのズボンはどうも私のおしっこやばばで汚された。父は抑えきれない悲痛の気持ちを爆發させ、大きな手を振り落とし、「パチパチ」と小さい尻を叩いた。「ワーワー」と赤ちゃんが泣きじゃくった。この泣き声で大人たちは更に胸が痛かった。皆は父を止めたり、赤ちゃんをなだめたりして、まるでこの世界が崩れたようだった。

あ、太陽が顔を覗かせてきた。風も幾分弱まった。陽射しは体に浴びて、更に人々の心に照らしたようだ。この暖かさがだんだんとみんなの心の冷え込みをなごませてくれた。こんな時、人々に最も必要なのは太陽だ。

「寒陽、寒い冬の太陽！ 皆に好かれている厳冬の太陽だ。もしこの子が将来、誰でもすきな太陽のようになってくれれば、最愛の琴ちゃんも喜んでくれるだろう」父はこう思うと、気も大分楽になり、コートを脱いで、赤ちゃんを包んだ。すると赤ちゃんも泣き止んで父の顔をみてにっこりした。父は顔を近づけて赤ちゃんのほっぺたに口づけして、言った。「行こう！」

それから20年経った。ある日私は1冊の古いアルバムの中に、1枚の結婚披露宴の招待状を見つけた。ピンクの地に紅の字がこう印刷してある。

私たち2人は1953年1月2日に常州で結婚式を行います。ささやかな宴を用意しておりますのでご出席のほど謹んでお願い申し上げます。

ご一家のご臨席をお待ちしております。敬具 趙君行、汪琴琴
場所は小南門内営房町七号弊宅にて。

上にはまたペンで次の通り書いてあった。

汪琴琴、25歳にして没す。中華民国21年（1932年——作者の注）、歳時壬申、陰暦は7月12日寅の刻に生まる。痛ましきこと西暦紀元1956年、歳時丙申、旧暦の正月6日申の刻に病死す。佳城は黄土故郷の1ムー又3分の田にて安葬し、乙山辛向に立して正分は金なり。大吉。

第一楽章 父親

父の趙君行は、1926年11月14日に江蘇省常州市のある貧しい家庭に生まれた。祖父は金持ちの坊やとして生まれたが、肺病を患って早死にしたため、父は幼少から叔母さんに引き取られて育ってきた。この叔母さんは今の私の祖母趙嬾だ。その年代の女性はひとたび嫁ぐと、夫の姓に変えて名乗らなければならない。父は趙家唯一の息子で、祖母は趙家の後継ぎを守るために終身結婚することはなかった。

父は幼い頃から体格がよく、がっちりしていて、牛のように力が強い。それゆえ綽名は「趙牛」だったという。あの時代は子供達がまだ私塾にかよっていた時代だった。私のこの牛親父は生憎、子供時代は読み書きが好きではなかった。本を手にとると眠くなるという。このため祖母によくお仕置きされたらしい。祖母も息子の出世を願うあまりに、毎日小さな一尺の物差しを持って父に読み書きをさせていた。その甲斐あって父は綺麗な書が書けるようになったものだから、後日私が汗顔するところになった。

家中は清貧で、生計は主に祖母が内職の針仕事をすることに頼っていた。家の力仕事は、言うまでもないが、祖母の心配もなく父の出番だ。父は読み書きよりも力仕事の方が性に合うようだ。父にしては、読み書きせずに毎日働いたほうがよいのだ。しかし、祖母はそうはいかない。夜になると石油ランプを点け、父に宿題と習字をさせながら監督する傍らそばで針仕事をはじめ。父はもう本を開くと元気がなくなるわけだから、読んでいるうちにそのまま机に俯いて寝てしまう。祖母はこの有様を目にすると腹を立て、手にしている針をそのまま刺してしまう。父はハッと目が覚めて、またうつらうつらと本を読むが、そのうちまた寝てしまう。また刺される。何回か繰り返すと、祖母も怒る気をなくし、ため息をついて言う。「この馬鹿息子が！ 早く寝なさい！」これを聞くと父は特赦されたように腰掛けから飛び降りて手早く書物を片付けてベッドに入る。しかし、祖母はいつもランプの明かりで深夜まで内職を続けた。生活がかかっているからだ。

ある日の朝、父は早起きして玄関を開けたら玄関口には竹かごが置いてあるのに気づいた。誰かがわざと置いていったようだ。近付いて見ると、あらまあ、赤ん坊だ。父は早速で奥に戻って叫んだ。「お母さん！ お母さん！ 玄関に赤ちゃんがいるよお」祖母は急いで服を着

て出てきて見ると、本当だ、まだ生後1か月未満の赤ちゃんだ。丸い小さな顔はとてもかわいい。仏教徒の祖母は「阿弥陀仏、阿弥陀仏、罪よ、罪よ」と唱えながら、赤ちゃんを抱いて家の中に入った。おくるみを解くと、中に子供の生年月日を書いてあって、2枚の銀貨も入っていた。赤ちゃんは女の子で、体には疥癬が生えていた。祖母は考えた。息子を1人引き取ったが、まだ娘がいない。いっそ、この娘を引き取ろう。息子1人と娘1人で、老後も安心だ。そこで祖母は父に言った。「これは神様がおまえに妹をプレゼントしたんだ。もらっておきなさい」父はとてもうれしかった。もともと家には一緒に遊ぶ相手もいないので、妹がいてくれると、ありがたいものだ。祖母は医者を呼んできて赤ちゃんの病気を治療してもらい、また乳母を頼んで、おっぱいを飲ませた。この赤ちゃんは小さいときから体が弱く病気がちで、祖母と父は一生懸命面倒を見て、やっと彼女は難関を乗り越えて生き残ることができた。祖母は、最初は彼女に「趙漣漪」という名前を付けたが、彼女が大きくなって社会人になってからは父の名前に並んで「趙君萍」と改名した。彼女はつまり私の叔母だ。1931年の生まれだ。

1938年、日本軍が常州に侵攻して来た。日本軍機は頻りに空爆するから、一家は日々恐怖に包まれていた。夜は掛け布団をテーブルの上に敷いておいて、そのテーブルの下が寝床だったのである。のちに、もうこれ以上市内に居られないので、一家は市内から約10キロほど離れた王下村に疎開して来た。遠い親戚がいるので、その家に避難して来たのだ。一家3人で親戚の家に居候しているが、2、3日ならいいけれど、時間が長くなると、いろいろと、親戚も内心では面白くないわけである。ちなみに遠い親戚だし、普段はほとんどお付き合いをしていないのだ。そして、避難も命拾いしたようなもので、何も持ち出さず、小さな風呂敷に簡単な着替えを入れただけで、持ってきたわずかな小銭は何日も持ちきれない。いつになったら戻るか誰もわからない。遠い親戚の家の者は当てこすりを言うのも仕方がない。しかし、父は熱血漢で、まだ12歳の子供とはいえ、がっちりしていて、立派な若者だ。耳を刺すような当てこすりを黙って聞いていられないわけだ。頭にきて、何も言わずに常州に帰ってしまい、祖母は気絶するぐらい心配だった。

常州城に戻ったら目に見えたのは満目創痍で、あっちこっち焦土と化し、まだ黒煙をだしている家屋は点在している。家に辿りついて見ると、建物は残っているが、室内は狼籍を働かれた後で、少しでも良いものは物色されて、残されたものは重たい家具類の食卓や長椅子と腰掛けぐらいだった。幸いなことに家は火に焼かれていなかった。それで身を寄せる所があって、街頭を放浪しなくて済んだのだ。そのときは年配の大家さんも帰っていて、この路地中にはただこの老若の2人だけだった。大家さんは田舎から少しお米を持って来ていたので、父は町中燃え崩した家屋から、まだ煙を出している太い梁を両腕1本ずつ挟んで持ち帰り、斧を見つけて割って薪にした。とりあえず2人はお粥を作って食べて、寝ることにした。

翌日、大家さんはまた田舎からなんとか少し卵や刻みたばこ等を調達してきて、それを父に街へ呼び売りしてもらい、小銭を稼いで過ごしていた。

ある日、1人の男がたばこを1個買った時、父にこう言った。「ぼく、金を稼ぎたくないかい？」父は「どうやって？」男は、「ついて来い」男は父を誰もいないところに連れて行ってこう言った。「我らのために塩を山の方に運んでくれないか。お金はやるぞ。ただ日本軍の封鎖線を通さないといけない。やれるかい？」父は生まれたばかりの牛の子虎知らずで、やる気満々だ。虎も怖がらないから封鎖線はなんのその。胸をたたいて、「やる！」の一言。男は父を1軒の店に連れて行った。彼は父が着ている綿入れの上着を脱がせ、中から綿を取り出して、塩を入れた。縫い合せてからまた着せた。外は藁縄で結んだ。よく見ても分からない。男は言った。「ぼく、君は自分の小かごを提げて、堂々と一号橋（そこは日本軍の封鎖線でもあった）を渡りなさい。湖壙橋に着いたら、こちらの仲間が待っているから」。それで、父はよく彼らに頼まれて塩を運び、少し稼いでいた。後に分かったことだが、彼らは共産党所属の抗日ゲリラだった。

数ヶ月後、日本軍による焼き払い、殺戮、強奪の嵐が去った後、父はやっと祖母と叔母を迎えに田舎に行ってきた。途中で日本兵に若い娘がばれないように祖母と叔母は鍋炭で自分の顔を黒く塗って隠し、家に着いても、数年間は玄関を出ることも恐れ、一家の生計は父が竹かごを提げて品物を売り歩いて稼いだ小銭で賄っていた。当時、お米は1升（750グラム）でただの16枚の銅貨（大体5銭ちょっと）で、あと少し野菜、豆腐を買えば生活ができるので、1日10銭でも稼げばその日の暮らしが何とかなる。勿論、それはもう最低の生活だ。

父が16歳になった時、大成一廠の梱包室で働くようになった。小紗包の梱包が仕事だが、1日に12時間も働き、出るのも帰るのも暗いうちだった。週に1日だけ家に帰れるが、工場を出る時は退出券を書かなければならない。後に、日本人による綿糸供給の独占で大成一廠は続けることができなくなった。父は知人の斡旋で協盛紡績工場のエンジン室の下働きとなったのだ。

その時代の織機の動力はまだ木炭を燃料としていて、毎日の明け方頃父は必ず労働者が出勤する前に工場のエンジンを起動しなければならない。このようなエンジンの起動は、恰も昔の人たちが毎日ご飯を炊くために練炭ストーブを熾すのと同じように、まず大きなストーブの中に、紙を火種にして薪を燃やし、そして窯口を閉じて、火が外に逃れないようにして、その煙（ガス）をエンジンに導入し、それから手で大きな整速輪を廻し、機械が起動するまで廻し続けるのだ。

エンジン室には杜という技師と父の2人だけだった。全工場の80余りの織機の動力供給を任されていた。力仕事はもちろん父で、杜技師は技術面の仕事のみだった。こうして父は1日

働いたら、体中まっ黒な煤に汚され、ただ2つの目だけが白いものだった。こんなに働いても1ヶ月の給料は僅かな8斗の米だった。毎月、家賃の5斗の米を払ったら、残った3斗だけの米ではとても生活ができない。仕方がなく、こっちの仕事が終わると、リヤカーで布の運搬をしにいかなければならない。その時の運搬車は木製の一輪車で、腰の力でバランスをとりながら、「ギーカ、ギーカ」といわせて押して進む。毎日、協盛布会社から40匹（1匹は約40ヤール）を積み、高い御史橋を渡り、南大街の商社に届き、帰りは40包の綿糸を自分の工場へ運ぶ。一往復すると10銭、20銭稼げる。多少なりとも、家の支出の足しになる。あと、祖母と叔母が針仕事や花の刺繍のような内職をすることで、なんとか一家は飢えなくてすむ。3人は助け合いながらなんとか生き延びた。父は叔母と小さいときから1度も口喧嘩していない。その後から今でも、2人とも70を過ぎたが、電話のときはまだ「君萍」、「兄ちゃん」と、親しく呼び合っている。

1945年8月、八年の抗日戦争の末、中国人民はついに勝利の日を迎えた。

民衆は喜び勇んで、総出で街頭に勝利を祝いに出た。これで民衆は天下太平と思い、良い日を過ごせると思っていた。

その日、祖母はわざわざ2、30個の銅貨を取り出して、父に街へ行かせて少し肉と野菜を買ってもらって、家族でやっのご馳走を食べることができた。一家は楽しく過ごし、晩もよく眠れるのだった。

しかし、外来の侵略を鎮めたばかりなのに、また内戦が起きて、人民は依然として苦難の海に。城門では日本兵がいなくなったと思ったら、今度は国民党兵になった。国民党兵は日本兵に勝るとも劣らないぐらい、金品強奪し、庶民を抑圧した。最も憎いのは保長（百戸長）、甲長（十戸長）らだ。彼らはもっぱら勢力を笠に着て人をいじめ、郷里の人々を食い物にして、酷く民衆を圧迫し、搾取した。当時の住民は十戸を一甲とし、一甲ずつ1人の長を置き、そして十甲を一保とし、一保ずつ1人の長を置いた。人民解放戦争が着々と勝利するにつれ、こいつらが国民党統治の日時が残りわずかと知りながら、ますます庶民達に対する搾取に拍車を掛けた。

当時、蒋乾大という保長がいた。ある日彼はやってきて祖母に言った。「最近ちょっと手元が少しきついで5圓ばかり貸せや」と。祖母は「ねー、蒋保長さま、ご覧になってほしい。この家は、息子1人に工場で働いて一家を支えてもらっているから、お貸しできるお金はどこにもありませんよ」と言いかえしたが、この蒋乾大は「そうか、貸さんのか。覚えとけよ」と祖母を睨んだ。祖母は慌て作り笑いをして言った。「蒋保長、貸さないのではなくて、本当に無一文なので申し訳ありません」蒋乾大「ヘン」と鼻であしらって、くると背を向けて去っていった。

祖母が、今日は災いを招いてしまったと悟り、あいつがどんな報復をしかけてくるか心配でならなかった。叔母も怖くて泣きそうだが、さすが父は男で、テーブルをたたいて立ち上がって言った。

「お母さん、漣漪、心配しないで。あいつは私達には手出しできないはずだ！ 私も弱虫ではない。共産党の軍隊はもう直に来るらしいから、私達庶民たちの軍隊だそうさ。世の中は変るぞ」

数日後、蔣乾大はまたやってきて祖母に言った。「お宅の息子は、徴兵されたぞ。早く仕度しろ。2日後に兵隊が連れに来る」祖母は慌てて言った。「蔣保長、助けてくださいよ、息子連れて行ったら、私達女2人はどうやって暮らしていきますか。規定があったでしょう。一人っ子は徴兵されないと断言しているではありませんか」蔣乾大は冷笑して言った。「今は非常時で、もうそれどころじゃないぞ。いかないといかん、上の命令だ」祖母はきっとその5圓の「借金」の事のためだと分かって、母子家庭ではとても抵抗できない。本当にどうしようもないのだ。

晩になって、一家は一緒に座って、ため息をついたり、涙が流れたりして対策を相談していた。祖母と叔母は女性で、なんの考えも出なかった。父は長く考えこんで、こう言った。

「しょうがないから、私がともかく数日隠れるよ。あいつら連れに来ても、しらないと言って。恐らくあいつらも女に手を出さないだろう。この嵐が過ぎたら、すぐ帰ってくるから」

ほかに手はないので、祖母は風呂敷に着替えを入れて明け頃ともなると父を見送るつもりだった。

この夜、家族はだれも眠れず、祖母は心配でずっとあれこれと注意事を言い続け、叔母はただ泣いて泣いて、まるで死別の夜だった。皆は朝方になってやっと、うとうとして少し眠った。

夜が明けると、父はくりりと起きて、2本の魔法瓶を提げてお湯入れに出て行った（訳注：昔中国の町では、朝にお湯を売り歩くお湯屋さんがいた）。父はお湯を入れてから水甕にも水をいっぱい汲んで入れて、それから練炭ストーブの火を起こしてご飯を炊いて、食べたら出発しようと考えていた。ところで横丁を出ると目の前の様子にびっくり仰天。なんと城門は開かれ、今までの国民党哨兵は1人もいなかったではないか。街の中は静まり返っていたけど、軒下には解放軍の兵士はずらりと座っている。父はもうお湯よりも、早足で家に走って帰って、興奮気味に叫んだ。「お母さん、妹、解放だよ。助かったよ。もうどこも逃げなくてもいいよ」

父の声で祖母はいきなり起き上がった。目にいっぱい涙を浮かべた。「阿弥陀仏、菩薩の加護があったよ。菩薩様がお目を開いてくれた。善人は報われるものね」

叔母もすぐさま起きて服を着て、父の手を引っ張って言った。

「兄ちゃん、早く見物に行こうよ」

兄弟2人は街にやってきた。見ると、人々は家から卵やパンを持ち出して解放軍の兵士に差し入れた。しかし、兵士たちはだれも受け取らなかった。彼らは笑ってこう言った。

「おじさん、おばさん、私達は人民の子弟兵だ。規則があって、大衆の物品を取ってはならないのだ」

これは民衆が本当に解放された日だった。父はこの日の情景について今なお生き生きと覚えていて、一生忘れられない日だった。

その日は1949年4月23日、土曜日、常州解放の日だ。もし、共産党、解放軍がその時常州城を解放しなかったら、父は台湾に連れていかれたかもしれない。そうすると、中国の改革開放後に、台湾の老兵たちが大陸の故郷に帰って起きた肉親捜しの悲喜劇の中に、父がいたかもしれないのだ。

(未完)